



TITLE:

<第4章>これまでとこれからの工学  
倫理:あとがきに代えて

AUTHOR(S):

田中, 一義

---

CITATION:

田中, 一義. <第4章>これまでとこれからの工学倫理:あとがきに代えて.  
京都大学高等教育叢書 2004, 20: 187-189

ISSUE DATE:

2004-03-22

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/54002>

RIGHT:

## 第4章 これまでとこれからの工学倫理

### —あとがきに代えて—

工学倫理 WG 田中一義

(新工学教育プログラム実施検討委員会委員長)

工学倫理科目の実施について企画し始めたのは、平成12年度の夏から秋にかけてであった。当時はファカルティ・ディベロップメント(FD)活動や、アウトカムズ評価などの言葉が飛び交い始めた時期であったが、これとほぼ並行して認識されてきた JABEE 認定にとって必要な工学部専門科目として対応するためであった。

このような新しい意味での工学教育及びその周辺の企画・実施を担当してきたのが新工学教育プログラム実施検討委員会である。当時の荒木光彦委員長の要請により、この委員会の中に工学倫理 WG (当時の委員は故上林彌彦教授、武田信生教授および田中の3名) を作り、工学倫理科目の立ち上げを目指した。

WG で当初から念頭においたのは以下のようなことであった。

- (1) 工学部全学科の学生が受講できるようにする。
- (2) 各学科における「専門的」な工学倫理でなく、全学科の学生にとって専門外であっても工学技術者・研究者として最低限必要な知識を共通的に与えることを目指す。
- (3) 担当教官としては、いわゆる工学倫理のトータルな「専門家」に任せるよりは、本工学部の手作りのなものとし、各学科から1、2名の教官に出て頂き、その専門範囲内での工学倫理に絡む問題を講義してもらう。
- (4) 工学部専門科目は過密なので、工学部の共通科目として設定するときは4回生後期配当とせざるをえない。
- (5) 全学科にまたがる講義であるために、統括的に教務関係を世話する学科事務室がなく、本 WG が直接工学部の教務掛と共同でこの作業に当る。

上記のうちで(1)―(3)は相当にきついことであるが、これにより個別的な工学倫理の概念習得を目指すよりも、工学部学生として最低限知っておくべき内容を教授することと、かつ共通講義を受けたという一体感を持た

せることに重きをおいたためである。これにより各学科からの教官には自学科の学生のみを相手にするのではないという相当な負担を強いることにはなるが、時間進行的には本科目を基にして各学科で独自の工学倫理を設定するようになればそれはそれでよいという、過渡的な意味を持つものと想定した。

さらに、当時は雪印乳業、JCO、三菱自動車などにおける種々の問題が起きていたときでもあり、単に JABEE 認定対応というよりも、工学技術者・研究者として必要である最低限の素養を身につけてほしいという願望もあった。この意味で本科目は全学共通の A 群科目に似た性格を持つが、1 回生のようなジュニア年令で受講するよりも、ある程度工学教育を受けて、技術者としての自覚が出てくる学年の方が良いという考え方をした。このことは上記（４）を正統化するかも知れない。また（４）の派生事項として、卒業単位の不足がちな学生にとっての、味方になるかも知れないという想定因子もゼロではなかった。

科目の立ち上げに際しての教官ミーティングにおいては、工学倫理の講義を担当することに対する戸惑いの声もかなりあった。これは「倫理」と名のつく科目に対する遠慮感、工学倫理という Wissenschaft がまだ未確立というイメージが強いことから来る不透明感などが縋い交ぜになっていたためと推量できる。少なくとも筆者自身から見ても、確かに当時は工学倫理についての教科書は存在しなかった。強いて言えば、フォード・ピント事件やチャレンジャー号事件に代表されるような事例をいくつか纏めて「工学倫理」書と名乗っていたものはあった。しかしそれは読めば済むことであるし、特にその購読のための講義をするほどでもなく、やはり講義者の経験と肉声から滲み出るものがほしいと考えた。このために、特に立ち上げの際の教官にはご迷惑をかけたことになろうし、かけ続けているであろう。すなわち教官にとっても、おそらく本科目は教授内容の模索継続を強いる厄介で特異的な型のものであろう。

今回総長裁量経費を得て実施された「工学倫理」科目のスタッフディベロップメントプロジェクトは、初期の３年間で走り終えた本科目にとっての一里塚である。工学倫理ミニシンポジウムでは、異なる観点を持たれる複数の工学倫理の専門家からそれぞれの立場で講演頂いたうえで、この講師をまじえながら担当及び関連教官間でそれぞれの教授内容の情報の交換や問題意識の討論をしあう場を提供し、よりよい講義につなげることを目指した。また参考のために、平成１５年度の工学倫理講義で配付された資料の大部分も記録として所載した。

このプロジェクトを契機として、さらに本科目の内部的発展に基づく改善、

あるいは現状形態の発展的解消までも視野に入れて多方面からの検討が加えられ、よりよい工学倫理科目が確立されることを願っている。